

## 「明治大学における情報倫理教育の取り組み」

情報科学センター教育専門部会長・文学部助教授 土 田 昭 司 氏

土田です。お手元に「情報関係科目カリキュラムについて」という資料があらうかと思います。実はこれは皆様のお手元の青い表紙の冊子で、情報科学センター設置科目の syllabus から抜いたものです。2 ページ目から 7 ページ目まで抜いたのですが、これに関連する詳細は syllabus の方をごらんいただければ、参考にしていただけるとと思います。

明治大学の情報科学センターで設置している科目は、理工学部を除いて文系 5 学部と農学部の 6 学部そして短大の情報科目を担当しております。そのような状況でありますので、各学部ごとに情報に関連した講義内容を設定するということは十分考えられるのですけれども、情報科学センターは各学部に共通するものを授業として提供しようという大まかなスタンスで行っております。

皆様の中には、実際に情報科学センターの授業を担当してくださっている先生方もかなりいらっしゃると思いますので、既にご存じのことを申し上げてしまうかもしれませんが、情報科学センターの設置科目のことについて少し解説をさせていただきたいと思います。

先ほど所長からもご紹介があったのですが、情報科学センターでは大きく分けて 2 種類のプログラムを用意しております。これは学部によって認定方法が多少違うのですが、一つは、主として 1～2 年生を対象とした「情報基礎論」という科目ですが、その上に 3～4 年生対象で、「数値情報論」「文字情報論」「画像情報論」を置いております。これは来年度からは経営学部では 2 年生も受講できるようになります。農学部に関しては、今のところ「数値情報論」しか置いておりません。それから短大の方は各種情報論は取れないことになるのですが、そのかわり短大独自でこれに類するものが設置されているようです。

「情報基礎論」、「各種情報論」は I と II にそれぞれ分かれておりまして、半期科目 2 単位です。一昨年になりますか、大幅なカリキュラムの改訂を行ったときに、このような態勢をとったわけですが、段階履修としてありまして、「情報基礎論」の II を取るためには「情報基礎論」の I を取っていないと不行き届き。「各種情報論」の I を取るためには「情報基礎論」の II の単位を取っていないと不行き届き。「各種情報論」の II を取るためには I をという形になっているわけです。こういう段階的科目編成をとっております。

きょうのテーマである「倫理」ですが、これは「情報基礎論」の I で教えることになっております。つまり、情報科学センターが提供している科目プログラムを取るためには、必ず「情報倫理」のことについての講義を受けていなければならないという仕組みにしてあります。そのことについては資料の 3 ページ目、syllabus の 4 ページ目になりますが、「情報基礎論の枠組み」に書いてあり

ます。「情報基礎論」には、①情報倫理を含む「総合」という分野と、②機械としてのコンピュータとはどういうものであるのかをハードウェア、ソフトウェアに分けて、いわゆる理工学部の情報科学科で教えることを、もっとかみ砕いた内容で教える「コンピュータ基礎」という分類、そして③応用として①「ソフト等の活用」という3分野で構成されています。

このうち、「総合」では、基礎論のⅠで教えるということで黒マルがついていますが、1番の「情報学概論」は、そもそも情報というのはどういうものであるのかを教える。2番目は「高度情報社会」で、情報社会学ということになりますが、情報と社会とのかかわりを教える。3番目に「情報倫理」、少し詳しく申し上げますと、a. 情報社会における情報の価値、b. 知的財産権に関する問題（所有権・著作権・特許権等）の話、c. 情報にまつわる犯罪の話、d. プライバシーの保護に関する話、e. その他を教えようとうたっております。

実際上は、「情報基礎論」のⅠ、Ⅱを担当してくださっている先生方は、全部合計しますと二十数名です。合計90コマぐらいが全学で設置されているわけですが、それを30名弱の人間で担当しているわけです。大学の講座はすべてそうですが、タイトルがついていても実際に何を教えるかは、先生方にお任せするのが大学の講義といいますか、授業の基本であるという認識がありますので、実際には何を教えるのかということに関しては、実は先生方にお任せしているのが実情であります。しかし、いろいろな先生がなさっていることを教えていただきますと、かなり先生方独自にいろいろ工夫をなされて、いろいろな教え方をなされて、私の方もそういうお話を聞くと、「なるほど、そういうことを教えることもあるのか」と、非常に勉強をさせていただいております。

したがって、中身については、“先生方独自のもの”ということになってしまうのではありますが、しかし、先ほど所長からも少し触れられましたように、実際のところは、この「情報学概論」ともいえる「総合」に関することは、情報とは一体何なのか、細かく言えば、a. 情報の概念と情報の種類、b. 情報の発生と伝達・流通、c. 情報の管理と情報ネットワーク、d. その他を教えていただくことをめざしている訳ですが、当初このカリキュラムを教えてください先生方にこのメニューを提示しましたときには、何を教えたらいいいのか困るということで質問をかなり受けました。

「高度情報社会」は、マスコミュニケーション論などの社会学の素養のある方であれば、マスコミが社会に出現したときにどうなったとかいうことをからめて、講義ができるかなという気もします。ただ、これも、ここでは内実を飾らずに言っていると思いますが、30名弱の先生方のほとんどすべては理科系の先生でありまして、社会学をまともに勉強した経験のある先生はまずいないわけです。「社会学を知っていれば教えられるよ」とポンと文科系の人間は言ってしまいますけれども、しかし、これも実際は教えてください先生方にかなりの負担をお願いしていることになっていると思います。

きょうのこの会を設置したことからもわかるとおり、我々としても「先生にお任せ」ということで、「各自努力して教えてください」というわけには到底いかない認識しております。できれば教

員の中の誰かがこういうことに関して教科書を書くとかいうことをやってから、「うちのセンターではこういうことを教えようとしています」というのが本当は筋だと思うのですが、しかし、そうは言っても社会の状況を見ると、教科書ができてから「こういうことを教えることにします」というのではいかにも遅い。とにかくいろいろなところにあつれきを生み出して、無理なことはわかっているということでも始めないといけなく考えております。

若干いただいた時間があるようですので、「例えば」ということで、私が「情報倫理」を教えるときにどんなことを言っているかという骨子を少しお話しさせていただきたいと思います。

私は、「情報倫理」を教えるときには情報化社会の話から続けて持っていきます。情報化社会になって情報の価値がどうなるかということから話し始めるんです。情報化社会になって情報が大事だ。情報こそ価値の高いものだというふうに言う人は多いけれども、それは嘘だというのが最初の私の指摘なんです。なぜ嘘かというと、情報化社会になると情報は安くなる。下手をするとなだになってしまう。

こういう席でちょっと下世話なんですけれども、ラーメン屋の例を出します。皆さんがラーメン屋をつくったときに、とてもいいアイデアを思いついて、とてもいいサービスをしたとする。それから、とてもおいしい味つけをやって非常にはやったとする。これは江戸時代であれば、「あそこにおいしいラーメン屋があるから」といって大繁盛して、それで20年でも、30年でも食べていけるだろう。しかし、高度情報化社会になるとどうなるかというと、もうかっている店があったら取材が来る。マスコミがやってきて取材するわけです。サービスの様子をテレビで映して、それをただでみんなに教えてあげる。下手なレポーターだったら、厨房の中まで入ってきて、「このだしのとり方を教えてください。教えてくれないのならあなたはけちだ」という感じで、人のいい人は教えてしまうわけです。教えてしまうと、せっかく苦心して開発したおいしいラーメンのつくり方は、ただでみんなに知られてしまう。

つまり、情報が価値を持つのは自分だけが知っていて、ほかの人は知らないから情報は価値を持つわけです。ロス・チャイルドが、ナポレオンの戦争でどちらが勝つかということを誰も知らないうちに知って、パリだったかロンドンに帰って大もうけをして、今の財の礎をつくったという話は有名な話らしいんですけども、つまり、ほかの人が知らないことを知っているからいいわけです。そうすると、現在社会のように誰もが普通に生活すれば、みんな知らなければならない情報を全部知っているという社会状況であると、情報は全く無価値になる。情報が安くなるわけです。

もう一つ別な卑近な例を出すと、漫才家も情報化社会になって困っているでしょう。寄席しかなかった時代だったら、一つのネタで1年は食べられた。今はテレビに出てきて一つのネタをやったら1週間ともたない。つまり、“一つのネタ”というアイデア一つで昔は1年食べていけたアイデアが、今は1週間しかもたない。よくて数万円、高名な漫才家だったら数十万円ぐらいのギャラはもらえるのでしょうか、それにしかないわけです。到底1年の食いぶちにはならない。

そういう話をした後で「情報倫理」の話に持っていくんです。そうすると、情報が安くなる。自分が考えたアイデアを誰もが知っていることになってしまうと、一体みんなどうするだろうか。そうすると、新しいことを考えた人は、それを人に教えてしまっただけでみんなただで使ってしまうわけだから、誰も自分の考えたいアイデアを人に言わなくなってしまう。言わなくなってしまうまでだったら、その人も自分のアイデアに飽きてしまっただけで、「みんなに教えてもいいか」とか、ボランティア精神を発揮して、「みんなが幸せになるんだったら、僕は損をするだけかもしれないけれども、自分の思いついたアイデアをみんなに教えてあげよう」ということがあるかもしれないけれども、一番怖いのは、新しいことを考えても何の得にもなくなってしまうたら、誰も新しいことを考えなくなってしまう。つまり、社会の進歩がそこでとまってしまう。とすれば、“新しいアイデア”というか、誰も知らないようなことに対して、「それは価値のあるものだから、その価値に対して何らかの対価を支払います」という約束事をみんなで作らないといけないでしょうと言うんです。

したがって、誰かがプログラムをつくった。プログラムをつくったのは誰でもただでとって使えるのだったら、誰も新しいプログラムなんかつくろうとはしなくなってしまう。そうすると、社会全体が困ってしまう。だから、新しいプログラムが出てきて、つくった人が「使うんだったらお金をください」と言うのだったら、それは正当な権利であって、お金を払わなければならない。違法コピーをしてはいけない。

何回か授業をやってみて学生が一番納得してくれたのは、「情報がただになると誰が勝つか」ということを言うんです。誰が勝つかというと、結局資本力があって、いい人材を置いておところが勝つんだ。ラーメン屋の例でも、資本はないけれども、うまいラーメンをつくれるといって繁盛しているラーメン屋が、そのノウハウが公開されてしまったら、必ず大資本がやってきてその店よりも安く、同じおいしいものを提供する。大資本が勝つ。そうすると、弱い者は絶対に勝ち残れない。強い者だけが勝つという時代になるのだから、その意味でも“新しいアイデア”というものに対してはその対価を払わないと、強い者だけが勝って、弱い者は死ぬしかないよと教えると、学生さんは「なるほど、そうだ」というふうに言ってくださいます。そんな形で、例えば知的財産権は守らなければならないんだということは言っております。

私はこんなふうに話をしておりますけれども、ビデオ教材を使うというやり方もあります。NHKなどもウイルスが出て困ったという特集などをかなりやっていまして、いいビデオがあります。NHKの方に問い合わせしてみたところ、「授業で使う分には一般に放映されたものを家庭で録画して、授業で流しても何ら問題ではない」という回答をいただいておりますので、センターではそういうものを活用してやっております。

時間も差し迫ってきましたが、大学生に教えるときには、「なぜ倫理を守らなければならないのか」という、その「なぜ」の部分教えないと、なかなか納得してくれないようです。センターでも中学生用のビデオを買って見たのです。中学生用の情報科目のビデオのうちの1巻が倫理に関する巻

で、見てみましたところ、「なぜ」ということは言わないんですね。もう強圧的に「コピーをしてはいけません」、あるいは「ウイルスというものがあるんですから、怖いですね」とか、それで終わっているんです。中学生ぐらいの子どもに教えるのであれば、「いけません」でいいのかもしれませんが、やはり大学生に教えるのであれば、「なぜ倫理が必要なのか」ということを、我々がかみ砕いて教えられるように用意しなければならないなと痛感しております。

以上で終わります。

〈司会〉ありがとうございます。センターのスタンスだけではなくて、ご自身のご経験も大分語っていただきました。

センターで「情報倫理」を取り上げた一つの理由として、ちょっと補足をいたしますと、これからネットワークの社会になる。ネットワークが絡んできたら余計に「情報倫理」が重要になってくるはずだという考えがございまして、それで、第1回目の情報教育研究会を開催するに当たって「情報倫理」というものを取り上げさせていただいたわけです。

きょうは、講演者の中に、この次にお話しいただく中村雄二郎先生以外にも、他大学からもいろいろと来ていただいております。きょうはまだお見えではございませんが、専修大学の梅本先生は、私立大学情報教育協会において、『情報倫理』という題目のテキストが出ておりますけれども、その中の委員会のメンバーでもあり、またその著書の1人でもあります。その先生にも後半おいでいただきます。それから本日は早稲田大学の原田先生にわざわざお越しいただきまして、早稲田大学での情報教育の現状、今後の課題等についてお話を伺うことになっておりますので、お楽しみにしていただきたいと思います。

それでは、招待講演です。中村雄二郎先生です。明治大学法学部ですが、きょうは「情報哲学と情報倫理」という題でお話をいただくことになっております。よろしくお願いいたします。